

狂乱した混沌は過程と
結果で秋の空よりもら
りるれろ

と十十

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼には誰にも言えない秘密があった。

その秘密はノートに全て書かれており、あと数年もすれば黒歴史になるような代物だった。

だがそれは流出した。

それがあんなことになるなんて……。

目次

電波塔は、そこにあり!! | 1

弁当食いたきや箸を持って! | 11

電波塔は、そこにあり!!

「じつは私は転生者なんだ」

そんな一言が筒津に告げられたのは、午前の授業が終わり、やれやれ昼飯でも食べますかいな。と購買のパンを買いに行くついでに便所に小用を終え。ハンカチを忘れたことに気づき、洗った手をズボンを叩くふりをしながら拭っている最中のことであつた。

じつは、とは聞くが筒津は目の前の人物について知るところは多くなかった、簡潔に二人の間柄を説明するならクラスメイトであり、保健委員のメンバーであることぐらいだ。

会話を交わした覚えもさほど多くなく、さしあたってそんなカミングアウトを受けるぐらいの、親しい間柄でないはずなのだ。

まあ、それでも「私」が「あなた」よりは良いかと筒津はおもう。

きょう日この頃、妄言を吐く人のことを電波と呼ぶが、信じる人が自分自身しかいない場合は悲しきかな、世の中ではそれを狂人と呼ぶ。

崇めるのは自分、信じるのも自分。そんな狂気な世界への誘いとも言える告白を聞か

されて筒津は約三十秒、脳裏の考えと裏腹にポカんと、その人物を見つめるはめになった。

細く凛々しい眉に健康そうで瑞々しい唇、ややつり上がった切れ長い目、力強い意思が籠った瞳には無類の自信がこめられていた（あるいは狂信的な）。また顔立ちは男勝りで、中性的というよりはボーイッシュ、それに合わせたように短くしてある髪型は彼女によく似合っていた。つい先程の発言さえ聞かなければ、ほどよく眺めていたくなる美少女だ。

ああ、なんて返事をすればいいのか、何故自分は悩んでいるのだろうか。むしろこれは聞き間違えなのではないだろうか、筒津はかく現実逃避を試みてみたが、目の前のクラスメイトは、それを許してくれるほど甘い存在ではなかった。

「前の世界では、シノノメヤコヤ東雲矢戸爾と呼ばれていた」

シノノメヤコヤ……。いや、あんたは野崎夕子だったろ。しかし筒津はまだ声を出して突っ込まない。

いや突っ込めないのだ、転生がなんたらとかシノノメがなんたらとか全てどつかにいても、やっかいな人物に目をつけられたという事実を筒津は認めたくなかった。

一つでも声を出してみろ、俺の日常がこうだぜっ！

筒津は、日常と書かれた壁が、粉塵を巻き上げて崩れ落ちる姿を想像してしまった。

そんなことを考えているうちに、どこぞのオペレーターボーイスで「第三波きますッ」みたいなとりあえずそれくらいの威力をもった発言をされそうなので。

筒津は……………。

地面に両手を……、指を立てるようにかまえ頭は低く、右足を立てて——。
走り去った。

「クラウチングスタートだと……」

彼女を一人、ダイナミックスルーして。

筒津は走った。

妹の結婚式のためでも親友のためでもなく、純粹に自分自身のために走った。

メロスも道中は、きつとこんな気持であったに違いない。

こうして筒津は、廊下の端からはしまで全力疾走をかまし、途中注意をうけながらもなんとか屋上へとやってきたのであった。

何故屋上に上がれるかというと、そうであるからとしか言いようがない。

つまりはそういうことなのだ。むろん校則では入ることを禁止されている。

息も心臓もいい感じに上がったのを鎮めるために、筒津はどかりとその場でくずれ落ちる。

思いは一つ、ああ怖かった。

筒津は、オーアールゼットといった風体で息を切らす。なぜ俺がこんな目に。

人生とは無情で非常に厳しい現実しかないことぐらい知ってはいたが。

いまだに優しい現実という幻想に取り憑かれた人間に出会うとは、なんとも不運ではないか！

ああ、日本の教育機関はいつたいていどうなっているのだ、これもなにもかも「ゆとり」が悪いのだ。

あの暗黒の時代の水で育ち、皆と一緒にという幻想を信じ、闘争心の刃を引きぬいたあれが。

頭がお花畑のような狂人をつくりだすのだ。と筒津は行き場のない憤りをめちやくちやな理論であたりちらす。無論でたらめである。

そして不意に気づく己の空腹に。

さらに盛大に鳴り響く腹の音。

滴り落ちる汗もあつてか、喉が乾く。

筒津は、再度、再び、もう一度おもった。なぜ俺がこんなめに。

ああ、人生とは、無情で非常に現実の連続だ。

春の日やあの世この世と馬車を駆り……。

おつかちゃん、俺くじけそう。筒津はがっくりと肩を落とすほかなかった。

そこでピロリピロリと鳴く携帯電話、泣きたいのはこっちだと筒津は、気だるそうに取り出し画面をながめる。

「……遊びにいくよ？」

それはメールであった、内容は何処かで聞いたことがあるような、そう宇宙人あたりがふつてきてもおかしくはない、いやなんのことだ。

つまるところ、筒津自身まったく身の覚えがない内容であった。

何故かという。いや、それは彼の尊厳を著しく傷つけるものであり、明言しないことによつて救われる命があるが故にここで書くことはしない。

あるとすれば、先ほどの女子から、というのが一番妥当な筋であるが。

これは、またなかなかの恐怖ではなからうか。

来ちゃった……。とか言われてみたいワードランク年間トップランキング100位以内（脳内調べ）に入るのだが。これは笑えない。

お兄ちゃんどいて！ そいつ殺せない！ とかもつと笑えないので本気で恐ろしい。

あああ、今度は何処に逃げればいいんだ、これは国家の力に頼るしかない。

我が国は平和主義の民主国家だ。

そう筒津が思ってしまったのがいけなかったのだろうか。

それともはたまた、これが運命というものなのか。

いや、単に筒津が不運だったということなのかもしれない。

それを証明するかのように、気がつくのと筒津は背に大きな衝撃を受けぶつ倒れていた。

「我の名は、ライコ・トゥピド電子魚雷！ 情報の海で発生した生命体だ！ さあ我と一緒に青春を満喫しようではないか！」

天高らかに告げられる声、痛みでも代える筒津。

もうなにが何だかわからないが、新手の狂人がきたということだけはたしかだった。

「どうした筒津よ、さあ起き上がれ、今のはほんの挨拶ではないか」

どこの路上格闘家だよケツ！ 筒津は、痛みに顔を歪ませながらそのライコなんとかのほうにヨロヨロと向き合う。

「……篠山さん、なにしとはるんどすか……」

「さ、篠山ではない、ライコ・トゥピドだ！」

筒津が思わず京都訛りで聞いてしまうほど、目の前の人物は不可思議な格好をしていた。

ツインテールにした金髪のカツラにブルーのカラーコンタクト、猫耳つきカチューシャ。

服は、さすがにまずいと思ったのか制服のままであったが。筒津のいだけ、窓際で本を読んでいるちよつと地味目の子、というイメージを吹き飛ばすには十分な威力をもっていた。

女の子は高校に入ると変わる。とよく聞くが、こういうことだったのだろうか。

いや、それとも今日は非公式校内同人イベントでもあったのだろうか。

筒津は、首を右へ左へと傾げる。

「それで篠山さん、なにしてるの？」

「だから篠山ではなく、ああ、もうっ！ 我は、情報の海で発生した生命体で電子魚雷ライコ・トゥビドという兵器なの！」

「あー……。そのライ子さんは、どのような要件でここにきて、どんな懸案事項を抱えて、どうして俺にタックルかましてきたのかなああああああああああ!!」

「(ゴ)めんなさいー……」

筒津の突如のブチ切れに、少し涙目になりながら頭を手でおさえる篠山。

小柄なので、やたらその姿が似合う。

もう少しその姿を眺めていたい気もするが、瑞々しいがあかないのでとりあえず矛を

しまう。

「んで、なに?」

「えっと、その、あの……。一緒にお昼……。食べま、せんか?」

いまだシヨックから抜け出せないようすで。彼女はおっかなびつくりといった感じに、その小さな包を掲げながら筒津をみつめた。

「……もつと普通に誘ってくれたら、今より三倍嬉しかった」

「(ぎゅぎゅぎゅ)、(ぐめんなきさい)」

忌憚なき感想と、げんなりとうなだれる筒津をみて、はうう。やら、はわわ。とオタオタする篠山。

そんな彼女を宥めながら、筒津はあらためて自分が昼食をなにも持つてきてないことに気づく。

第二印象が天元突破な子とはいえ、女の子と一緒に昼食をとるという素敵トキメキイベントなのに、筒津には食べるものがない。

ちよつと涙でそう。色々な意味で。

筒津がドンヨリと肩を落としていると、篠山はそれこそ身を投げるような覚悟をした目付きで、筒津にもう一つの包を取り出した。

「それはー!」

「あああ、あの……ふふ二人ぶん作ってきたので、あの……たべても、も、」
神はいた。

最後の方は、もう小声でなにいってるかわからなかったが、よく意味はわかった！

もう、今日の出来事は全てチャラにしてい。そう筒津は考えるほどに多幸感で脳内がいつぱいになる。

年頃の男子高校生とは、女子に消しゴム一つとってもらえただけでも、何かと嬉しいオツムをしているので、それが手作りお弁当ともなるとそれはもう俺の人生が有頂天である。

今にも小躍りをかましそうになる筒津だが、一つ良いことがあれば一つ悪いことがあるのが世の常である。

篠山が差し出すお弁当を受け取ろうと、手を伸ばしたそのとき。

筒津の横腹に先ほどのタックルよりも強い衝撃がはしった。

当然、物理の法則にしたがい、筒津の体は地面と本日二度目の熱い抱擁。というか日に焼けてほんとうに熱いのだが。

とにかく、しこたま体を打ち付けられることになった。

「筒津！ そんな女の弁当より、私の愛妻弁当を食べろ！」

そしてまた本日二回目の高らかに告げられる声。

この声は聞き覚えがある。

できれば思い出したいくなかったが、思い出すほかないので思い出してしまおう。

そう、筒津が一番に出会った電波、もといいい狂人。

野崎夕子あらため東雲シノ矢戸メヤ爾コヤが、仁王立ちしていた。

ピンクだった。

そこで筒津の意識は、プツツリと途切れてしまうのは、だれにも責められないだろう。ちなみに篠山は白でした。

弁当食いたきや箸を持って！

冒頭歌

スカートよ

スカートよ

何故躍る

乙女の心がわかって

おそろしいのか

……ブウウウ——ンン、ブウウ——ンンンン……。

音……いや、振動だ。筒津つづつがウスウスと眼を覚ましたときもまた、それはしつかりと

体に伝えていた。

いったいなんだろうか、ぼやけた青空に霞がかかった頭でぼんやりと筒津は考えてみる。

ジッと青空を眺めているうちに、今がちょうど正午だということに気がついた。

日が高く、ちょうど真上にきてるからだ。サンサンとふりそそぐ日光に筒津は、ピクリピクリと目蓋を細め、ようやくいま自分が校舎の屋上にいるのだと認識する。

筒津は、起き上がろうと腕に力を入れる。固いコンクリートの上で寝ていたためか、体の各所が妙に痛い。

……おかしいな……。

普段ならば、校舎内で午前ないし午後を過ごしているのに何故自分は、屋上などにいるのか。

なにか青春の風でも香りでも唐突に感じたくなり、似合わぬ冒険心に若さという火をくべらせて来たのなら筒津自身も納得するところではあるが。

さてさて、この掴めぬ綿を頭いっばいに入れられたような違和感は、いったいなんであろうか。

……おかしいぞ……。

いくら首を傾げたところで、答えは出ない。何故出ない。そもそも何故とは何故なんだ。

何故という理由を考えることじたい、この現状にて考えるのはとても不自然で馬鹿らしいことではないのか、筒津はさらに頭を捻る。人は目的無く動くことができぬ生物で

あるがゆえに、その過程に本人しか知らぬ、いや本人でさえも不感知な無意識の理由であらうと、目的に向かつて行動していたりするのだ。

そこに何故は無い。もしそこに何故が差し込まれるならば連続として述のように繋がる”理由”を逐一として考え選択しなければならぬからだ。

その理由の理由を考えるほど、普段の平凡が似合う学生の筒津も暇では無いはずではあるが、筒津は、何が因果かそれをウンウンと力んでいるのである。

そしてその理由に行き当たった筒津は、愕然とするほかなかつた。

「記憶が……無い」

言葉に出してみると、意外と軽くぼろりと足元に転がるようだが。

心の基盤が音を立ててヒビ入るのを筒津は感じ。根底は崩れ、柱はみえぬ影のように臃げで。

足元に足は、土は、いや地面は、筒津は、自分は立っているのか座っているのかさえもあやふやになり。嗚咽ともれない叫びを噛み殺そうとすると、冬でもないというのにガチガチと奥歯が鳴り響き。不意に世界と身体が裏返ったようなそんな気持ちが脳裏を擦り。

強い目眩と

.....
衝撃が走った。

物理的に。

なんてことはない、振動は携帯のそれであり。

屋上に居るのは、クラスメートであり自称転生者の狂人にからまれたからだ。

そしてくだんの狂人は、やたら満足気に筒津を眺めているのであった。

「野崎^{のざき}さん、ちよつと今のは強引だと思えますー」

筒津をはさんでその狂人に向かって抗議しているのは、同年代よりやや小柄な。

これまたやつぱりちよつと、なんとというか最大限好意的に解釈をするなら個性的主張をもつ電子魚雷^{しのも}さんこと篠山^{ささやま}が、金髪のカツラをかぶりながらプリプリと怒っていた。

「東雲^{しのめ}だと言っている……。しかたなかったのだ、また何処かへと逃げられたら困るか
らな」

狂人あらため野崎、いや東雲……。野崎^{のざき}夕子は、腕を組み偉そうにも鼻でため息をつく。

そう、何がどういふわけか、筒津は現在進行形で黒歴史の Bloody Road を歩む戦乙女たちにつかまってしまったのだ。ハーグ陸戦条約は適応されるのであるか。

筒津は、未だにグワングワンする頭を擦りながらどうしものかと考えつつも、もはや蚊帳の外で言い合いを続ける二人を尻目に「腹減った……」と呟くほかなかった。

しかしながら、その一言が以外にも功を奏した……。と言うべきなのだろうか。

二人はピタリと言ひ争いを止め、片方は不敵に、片方は恥ずかしげに。筒津の前に2つの袋包をズズいと差し出してくる。

「筒津！ 私の弁当は美味いぞー！」

「あの、よかったら食べてください……！」

そう、それはまぎれもない弁当^{ヤッ}であった。

青空の下、屋上にて同級生の女子二人からお弁当を差し出される。

なんだこれは、何だこの状況は。あまりの非現実っぷりに筒津は、もしや自分は知らぬまに悪魔と契約でもしたのではなからうかと錯乱めいた想像をする。

だが、差し出されたが手前。男として、いち男子高校生としてそれを受け取ることにした。

もう狂人とか変人とかどうでもよかった。

むしやむしやして食べた、今は後悔している（後日談）

そんなわけでお楽しみのご開帳である。篠山嬢の桃色の包と、野崎夕子の紺色の包を
恭しくもひもとぎ。

現れたのは、やや小さめな小豆色の二段式弁当箱と、銀色が鈍く光るいわゆるドカ弁
という大きな弁当箱だった。

さて、ここからが本当の勝負どころである。

筒津は、厳かに、それこそ祈るような気持ちで一言。

「いただきます」

手を合わせた。

言ってしまったからにはもう戻れない。世の先人たちは、これに何度後悔し涙を流し
たこともそれこそ星の数ほどであろう、良い意味でも悪い意味でも。

だがしかし、真の男は一度言ったことは曲げない。曲げてはならない。

それがいかに焦げていようと、生煮であろうと、もはや料理の体を留めていなくても、
誰がために作られた物は、誰がために食べなければならぬ。それは神聖で不可避な行
為であるが故に、五腑が爛れようと完全食すべきものなのだ。

我、いま一気一千の魂をこめて箸をつかむ者なり。

筒津は、気合と共に弁当の蓋を開けた。

まずは、何はともあれご飯である、美味し弁当とはご飯で始まり、ご飯で締めくくられるものだ。

その比率は、おかずと比べて多くても少なくてもいけない。

さらに品々の味の濃さなども考えたとすると、ただ盛っただけでは黄金比は生み出せないこと必須。

長年の業と勘が必要になってくる。

さらにさらに、このように二段構えの場合はご飯の持つ湯気と熱でベチヨベチヨになりやすいので一度冷ますなりする行程が必要だが、これが長すぎるとご飯は硬くなり、 α は β に変わり、とてもじゃないが食べれたものではなくなるのだ。

とは言ったものの、今回はとりあえずこいつらを味方につけなれば、各々と戦えないので今回は無条件で可としておこう。

補給線として、ふりかけや梅干しなども付いているので持久戦も期待できる。

先ほど猛々しく量について講釈つかまつたが、今回は物量作戦である。

白の縦列歩兵隊を尖兵に、ぶんが悪い相手を物量で文字通り囲い飲み込むのだ。

古来より軍師達が好んで使ってきた由緒正しい戦術である。

今回は、それに加えて最大の武器、食の大艦巨砲と言うべきか。

かなりの空腹である。空腹に勝る調味料なし。この戦に敗北は見えぬ。だがそれでも敵情視察はかせない。勝ったと思つたときこそ帯を締めなければならぬ。

まずは篠山嬢のおかず、小さい器ながらも綺麗に収まっている印象を受ける。

唐揚げとハンバーグがメインにサラダ、スライスされたゆで卵にプチトマトが三つ。

食の赤・黄・緑。がそろつた素晴らしい内容だ。

ついでにちよこんと熊さんマークのクシが唐揚げに刺さっているのもなかなかポイントが高い。

相手として不足はない、だが今回はそれだけではとどまらないのだ。

倍プツシユだと言わんばかりの大きさを誇るドカ弁、狂気の沙汰ほど美味しいとでも言うのか狂人の野崎夕子の弁当を覚悟しつつ開くと。

ほどほどの量に均等に敷き詰められたご飯に、大きめの梅干し、それも市販ものではなく本場に長年漬けられた紅一点が真ん中に鎮座しているではないか。

おかずはシャケを中心に、菜っ葉のお浸しなどの青物も取り揃えている。

もちろん煮物などは、小分けに入れられてるので煮汁がご飯と混ざることもない。渋いちよいす、だがそれがいい。まさにお弁当である。

筒津は、この蓋然的な出会いに感謝すらした。

だがしかしここでよく考えてほしい、お弁当が二つあるという事実を。

そして、これから二つを同時完食せねばならない、という現実を。

難問だよ……これは。

筒津は、強く箸を握り締める。

進行ルートを綿密に計算しつつ、どちらの弁当も比重が均等になるよう食さねばなるまい。

また片方のおかずだけが余るような、畜生がやるような食べ方はもつてのほかだ。

このお弁当が好意的なものならなおさら、思惑的な代物であろうと打算が絡んでこようとも。

二つ同時に出されたのなら、二つ同時に完食するのが筋というものである。

そう「ごちそうさま」を二回言うことは許されないのだ。

さらに悠長にも食べてはいられない、昼休みが終わってしまう。そのためにも素早く的確に、かつ均等にペースを維持しながら食べねばならない。

いただきます、はもう言った。

箸も持った。

おかずの品々も確認した。

ならばもう語るべきものはないだろう。

戦いを……。

一心不乱の大戦争を！ 始めようではないか！

我が、胃袋に入らぬものなし！

推して参る!!!

といった若気のいたりは、この年頃ならば誰にでも一つや二つぐらいはあり。

ましてや女子からお弁当をもらった筒津の舞い上がりようは、それはそれは。

将来確実に布団の中、あるいはベットの所で悶絶することになること必須。

そして、このお弁当がきっかけに筒津は、彼女たちの動乱に否応なしに巻き込まれることになっていくのであった。

「ご、ごちそうさまでした……」

「お粗末さまでした。うむ、契約成立だな」

「わあー、よろしくお願ひしますー」

「……………」